

アオモリの作り手たち

▶12◀

「描くという行為は、もともと人間に備わっている。表現は子どもの方が豊か。教わる（こと）の方が多いです」

おいらせ町在住のアーティスト

ストで八戸学院短大教員の佐貫巧さん(37)は、2014年から八戸市を拠点に、3〜10歳の子どもを対象とする現代芸術教室「アトイズ」を主宰。子どもたちに表現する楽しさを伝えている。

ワークショップは各回完結型で、テーマを示した後は子どもたちの自由。「最終的に

案ですぐに答えにたどり着ける時代、自分で選り取って正解とする力、根拠のないものを信じる力が大切」と話す。静岡市出身。母方の祖父が洋画家で、筆や画材が身近にある環境で育った。高校時代に自分も絵の道に進もうと決意。油絵を専攻し、多摩美術大学、東京芸術大学大学院で学んだ。

若大の助手をしていた時に東日本大震災が起き、ボランティアとして被災地に駆けつけた。「念のため、絵の具を持って行っただけです。子どもたちを勇気づけられるかなと。でもそんな状況ではな

ただただ力月間が過ぎ去った。自分は何で絵を描いているんだろうという気持ち

「アトイズ」代表 佐貫巧さん おいらせ

答えをつくり出す力を

違うものができたとしても大成功。なぜなら、その子が自分で答えを見つけたから。アトイズに正解はない。ネット検

にさせられた」と振り返る。東北への思いが募っていた時に八戸学院短大の募集を知り、13年に八戸市に移住。保



120号のアクリル画「flow」の前に立つ佐貫さん。「この絵を見て、鳥やドレスみたいの子もいました」

育者を養成する上で自ら子どもと深く関わりたいと、同僚とアトイズを立ち上げた。結婚して息子が生まれ、昨年からおいらせ町で暮らす。昔は一人で絵を描いていたけれど、震災もあって自分を見つめ直し、絵で恩返ししたいという気持ちになった」と語る。

学生の指導や子どもたちのワークショップに取り組みながら、アーティストとして制作も続ける。絵画は一見抽象的だが、粘土をねねって胎児のような形をつくり、それをモチーフに描く具象画。

淡い色を重ねた不思議な形は、生き物のような温かさを

感じる。追求しているのは背景の青。日本の空をイメージした独自の青で「パワーブルー」と名付けている。

18年には、「ハチノヘブルー」と題した展覧会を開催。自身の作品のほか、市民から八戸で見つけた「青」の写真を集めて展示した。サバの横箆からコンニニの看板、かき氷を食べた後の舌まで、さまざまナブルーが会場を彩った。

「一人より、みんなで作品を創りたい」と表現が無限大になる。今はそれがすくなく楽しい。佐貫さん。「作品でもいいし、教育の仕組みでもいい。何か楽しいプロジェクトな環境を子どもたちに引き継いでいきたい」と意欲を語った。

（大友麻紗子） ※毎月第1金曜日に掲載し

△さぬき・たくみ 1982年、静岡市生まれ。おいらせ町在住。多摩美術大学卒業。東京芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。八戸学院大学短期大学部幼児保育学科准教授。2014年から現代芸術教室「アトイズ」を開始。八戸市や十和田市を中心に県外でも開催。アーティストとしても制作を続ける。